
私の体験した イギリスのナースリー



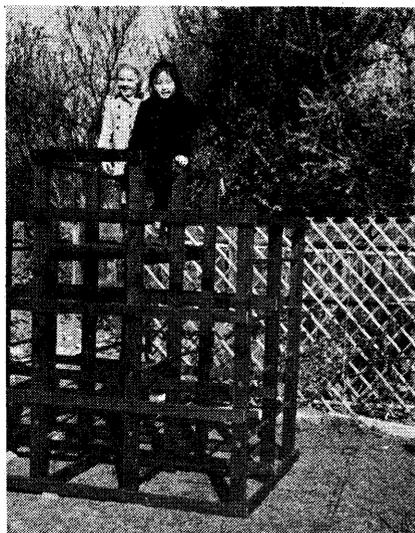
森 弘 子

昭和四十一年十一月、主人のケンブリッジ留学にともない、長女夏子（当時小学校三年在学中）二女潤子（当時幼稚園三年保育在園中）を連れ渡英、ケンブリッジ市内に一年間居住した。

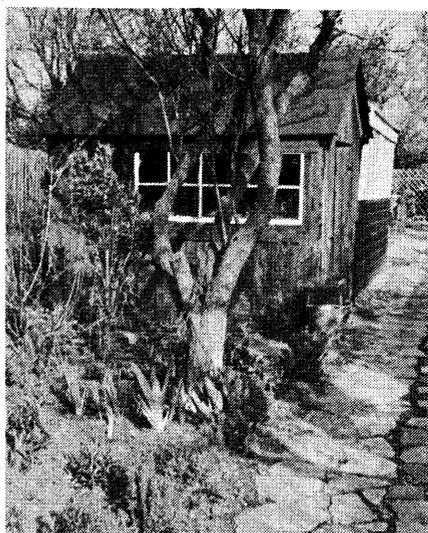
長女は到着翌日から市立の小学校に入学を許可されたが、二女は市立の初等学校には年齢が足りず、私立のナースリーを二、三訪ね歩いたが大きい所は定員過剰と断わられ、ようよう個人経営の小規模なナースリーに籍をおくことができた。

リンデンハウスと名付けられたこのナースリーは一見普通の家で、近づくと門柱にや々と読みとれるような小さな表札がかかっていた。

初日は玄関で私から離れ、勇んではいっていった潤子だったが、言葉が通じないという壁にぶつかって当惑してしまつたらしく、二日目からはわずか二時間半のナースリー生活を拒否しはじめた。腹痛を訴え、出かけることをしぶり、無理に連れていっても母親のあとばかり追い求め、おいてかえれば外まで泣いて追いかけて来るありさま。日本の幼稚園では一番早く先生やお友だちになじみ順応性のある子どもと思っていたので、私にとってはまったく意外、



木造のジャングル



庭の小屋

あ然とさせられた。

先生とご相談の上、最低の言葉を理解できるまではそばにつく事を許され、思いもかけずつぶさにナースリー見学の機会が与えられた。

ナースリーの概況

年齢 三歳半から五歳まで

人数 午前、午後組とも 十五、六人

時間 午前組 九時半から十二時

午後組 一時から三時半

設備 教室はおもやの階下一室

屋外に、物置に窓のついたような簡単な小屋

教室には古いピアノ、人形の家、色あせた木馬、足

つき画板

屋外にしろうとづくりの木造ジャングル、平均台、

太い木の板利用のブランコ

遊具 ままごと、積木、人形、パズル、トランプ、ボール、

本などわずか

費用 一週間約千円 月曜日ごとに持参



本を読みながら待つ



画板

イギリス東南部は雨が多く（ほとんど毎日一回降雨）庭がぬかるむためか、ナースリーに長靴をおくことを義務づけられた。タオル一枚とエプロン（型は自由、ナースリー内のみで使用）を袋に入れて毎日持参した。

人数がそろうまでは教室で遊び、大体そろった所で全員でお祈りをする。年齢によってクラスを二つにわけ、年少組には若い先生がついて雨の降らぬかぎり長靴にはきかえ庭にでて遊ぶ。年長組は七十歳ぐらいのミスの先生（経営者）の指導で歌や詩を覚え、あとは自由に二つある画板で絵の具のお絵かき（絵の具は毎日、びんに赤、黒、青、黄、緑の五色のみがとかれてあった）、クレヨン（大きな箱に使い古しのものがばらではいつている）のお絵かき、簡単なトランプ遊び、絵あわせ、はり紙（雑誌のカラーページがたくさん保存され、それを適当に切ってはる。ボール紙で身長四十センチぐらいの人型が用意されており、それに包装紙や古毛糸、あり布で衣裳をつける等）を行なった。

十時半近く、先生の合図で、二つの机に指名された子どもが花柄のかわいいテーブルかけをかけ、お皿を並べると、先生が牛乳びんにストローを入れたもの一本ずつと、クッキー二枚ずつくばって歩かれ、用意の整ったところで子ども

もたちは静座、簡単なお祈りの後、そろってそれをいた
いた。

すんだ子どもは指定の箱にびんとお皿を返し、本だなか
ら本を一冊ずつ持って来て、最後の一人が終わるまで、本
をみながら席で待つ。全員終わったところで長靴にはきか
え庭に出、年少組は交替して教室にはいり、おやつ、室内
遊びをした。

庭は芝生で、真中に小屋があり、両側には石でかこった
花壇、木々も多かった。

庭に出た子どもたちは自由に遊び、先生はよく草花の世
話をなされた。何人かの子どもは自然と先生のお手つだい
をして土と親しんでいた。

小屋には画板やおもちの大工道具などがあり、そこへ
はいつて自由に遊ぶこともできた。十二時近く室内にはい
り、帰りたく、お迎えの来たものから順々に帰宅させた。
三、四日たったころ、潤子が外に出たがらないところを
うまく利用なさり、小さいクラスが交替に室内にはいった
時、ミルクの世話、オーバーのボタンかけの手つだいなど
をさせてくださった。

潤子は、はじめはてれていたが、そのうちおねえさんぶ

つてすすんで世話をするようになった。かたくなにおしだ
まり、先生のお歌や詩の発音を真似ようとしなかった潤子
だったが、一週間たったころからポツポツ部分的に口を開
きはじめ、やさしい歌詞を口ずさむようになった。くつ屋
さんの歌で「あなたは何色のくつが欲しいですか」と一人
ずつ質問され、それに答えて好きな色を返事するのがあつ
たが、こんな時も指名されればどうにか色の名が言えるよ
うにさえた。

十日ほどたって見学者のあつた日、「今日からはここでお
かあさまに別れられなければ、それこそおばかさんですよ」
と玄関できつく先生にお言葉をいただき、こわい先生のお
顔に潤子も一瞬緊張して、べそをかきながらも一人で中
にはいった。少し自信も出てきたところへ、先生のきびしい
態度がよい刺激となって、翌日は自分から「一人で大丈夫」
というようになった。それから自発的に出かけるようにな
り、日を追って言葉をおぼえ、ほとんど毎日、その日に
したお絵かきや折り紙を持ち帰るようになった。

長女は当時九歳、お友だちが夏子が外国人であることを
認識し、特に先生から夏子掛りとして指名された二人の友
だちが親切に面倒をみてくれたので住みよい環境のようで

一言の苦情もいかなかったが、五歳前の潤子の友だちはそのような配慮をするには幼なすぎ、言葉の面でも行動の面でも、潤子は自分の力で皆のレベルに近づくより方法はなく、そこに潤子の苦しみもあったのであろう。しかしいったんお友だちとの交渉が生じてからは、先生の適切な指導もあり、言葉も動作までもイギリスの子どものように急速に変わっていった。

三月にはいったある日、迎えの折に先生に呼び止められ、「潤は大変英語がじょうずになったし、年相応の発達をしているから初等学校（インファントスクール）に移った方が本人のためにいいと思うので、校長先生にお願いしてみるように」というお言葉をいただいた。そして、後にのべるようにこのナースリーにお別れし、イースター後に初等学校に通学するようになった。

はじめの十日あまり、子どもと共にナースリーで過ごし、また初夏の一日、卒業生の母親として親睦パーティーに招待を受けて感じたことをここにまとめておきたい。

第一に、すべて質素であることにおどろかされた。絵をかく紙はすべて印刷されたホゴのようなものの裏面を使っ

ていた。へやの裝飾も廢物がたくみに利用されていたし、子どものお仕事の材料は、いずれも新品は使われなかった。クレヨン、のり、はさみなどすべて共同で使用した。

第二に、とぼしい材料をいろいろ工夫してつかっていたことに感心させられた。前述の、紙人形に洋服を着せることもその一つだし、年長の女子だけがとり組んだ花びんしきもよい例だった。

二十センチ四方の堅いボール紙のわくに、たこ糸がたてに平行して一センチおきにはられ、"under-over" といいながら、一定に切られた太い古毛糸の山から毛糸を一本ずつ抜き取って、はられたたこ糸の間を上下に交互にくぐらせてゆく。ぎゅっと毛糸をつめてしまうので、出来上がるまでは相当な日数を要したが、子どもたちはあきませず、毛糸の山ととり組み、それぞれに個性ある色あいの花びん敷を作り上げた。

子どもたちは、自然に古い物の活用と根氣のとうとき、やりとげた満足感を学んだことだろう。

第三に、しつけのきびしさを身にしみて感じた。年若い先生はこの道一筋に歩んでいらっしやった方で、一つの信念をもって動いていられるのがよくわかった。



毛糸の花びんしき作り

細かいことはうるさくはおっしゃらなかったが、朝の祈り、ミルクの時、帰宅時の三回は静粛をきびしく求められた、テーブルをきちんとセットするところはいかにもイギリス的で、イギリス人の節度をみせられた気がした。

老齡にもかかわらず、ピアノをひかれ、子どもたちと共に行きたい、動き、かくしゃくとしていられた。いっしょに庭を飛び回ることこそされなかったが、いつも子どもたち一人一人に気をくばられ、時にそばによんでは話をし、時には、自分から遊んでいる子どものそばにいかれては仲間にはいり、話をきき、よく子どもの心をつかんでいられたし、子どもたちもきびしい先生であるのに、祖母に甘えるよう

によくついていた。

トランプ遊びなど、はじめは二人ずつそばに呼んでよく説明しながらゲームを教え、なれると子どもたちだけで遊ばせて、見守っていらっしゃったが、何事も個人の能力に応じて、段階をふんでやってもらったのが印象的だった。

また、その日に親に連絡しておくとういような事が起こった時は、お迎えの時、最後まで待つようにおっしゃり、皆が帰宅した後、子どもを庭で遊ばせて、親に子どもの状態がよくわかるように話してくださった。

また、七、八人で一人の先生というのは、この年齢に理想的な型に思えた。そして、色とりどりのバラが咲きみだれるお庭で開かれた親睦パーティーは、紅茶、パン、クッキーのみのささやかなものだったが、先生は終始にこにこされ、一人ずつの卒業生の親に、子どもの初等学校や家庭でのようすをおたずねになり、いとご満足げにお見受けした。豪華な設備より、子どもを心から愛し、一つの信念をもって指導される先生に恵まれることが、いかに子どもにとって大切かを痛感した。わずか四カ月であったのに潤子の心に深くはいりこまれた先生であったようで、今でも文通させていただいている。